

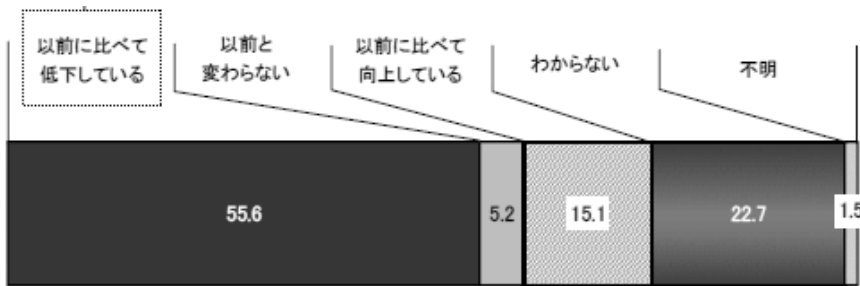
北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第731号 平成26年5月7日

子ども達を地域で守る（2）

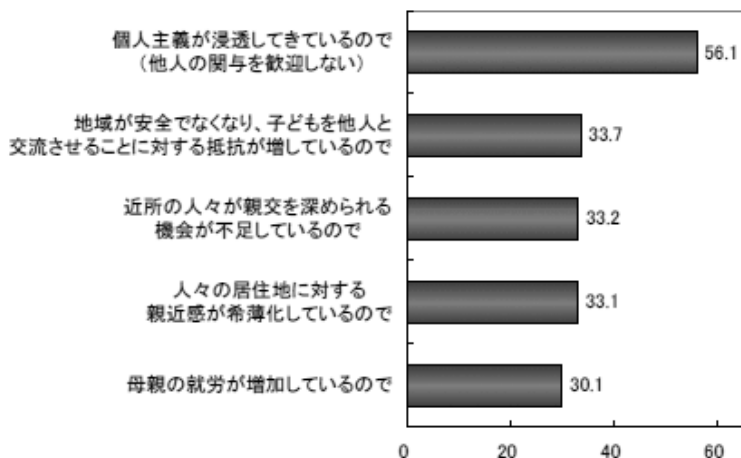
いささか古い調査になりますが、文部科学省が平成17年に実施した「地域の教育力に関する調査」において、保護者に「地域の教育力」を自身の子ども時代と比較してもらったところ、下図のように6割近い方々が「地域の教育力は以前に比べて低下している」と回答しています。



恐らくこうした印象は、今日ではますます深まっているものと思われます。また、地域の教育力が低下している要因について聞いた結果は左図の通り

ですが、これを見ても、「他人を干渉するつもりはないし、他人からも干渉されたくない」と感じている保護者が多いという事が分かると思います。

「昔は悪い事をしている子どもを見掛けたら、自分の子でなくても注意したものだ」と地域のお年寄り（私も十分老人ですが）からよく聞かされますが、最近はそんな事をするとその子の親から余計なお世話だと文句をいわれる恐れもありますので、迂闊な事は出来ません。まして、世の中物騒な事件が起こっており、簡単に声を掛ける事も憚られます。



しかし、「地域で子どもを守り、育てる」というのは、地域の皆さんがお互い相当に「おせっかい」でなければ出来ない事です。

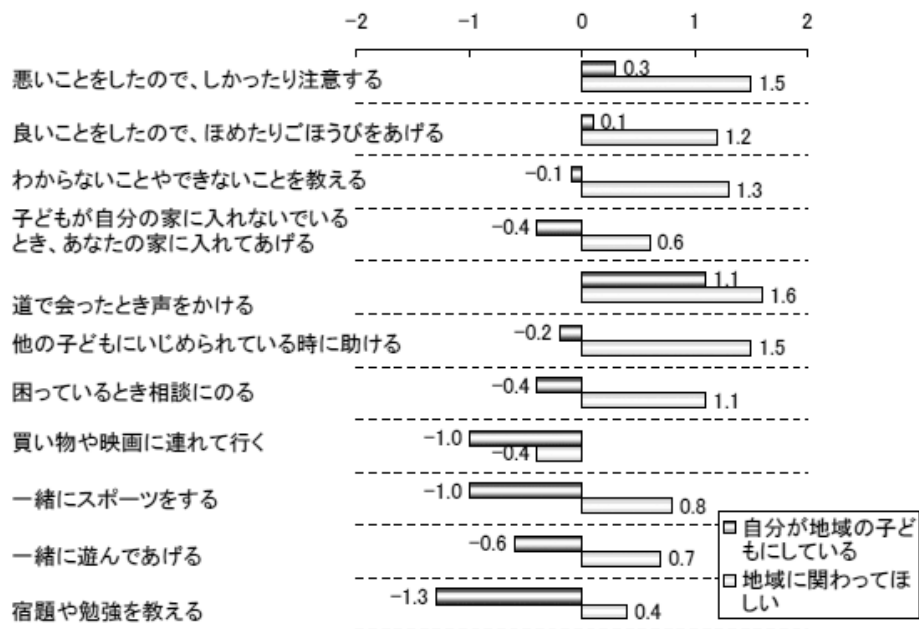
多分、地域の皆さんは、「地域で子どもを守り、育てる」という活動の重要性は理解しているでしょうし、参加したいとも思っていると思います。ただ、実際に行

動に移せるかという、事はそう簡単ではなさそうです。

この点について、上述の文部科学省の調査で興味深い結果が出ています。

それは、「自分の子どもに対して地域に関わってほしい」と考えている事と「保護

者が地域の子どもにしている」事とを比較したものです。その結果は下図の通りですが、全ての項目において「地域に関わってほしい」と考えている事よりも「自身が地域の子どもにしている」事は低いという結果となっており、「して欲しい事」と「やっている事」との乖離が大きい事を如実に示しています。



先日のチョットした出来事は、「地域で子どもを守り、育てる」という事が、□でいう程簡単ではない事を示すものでしたが、勿論、私は「地域の教育力」を悲観して見ている訳ではありません。

私の町内会にも子ども会活動がありま

すし、夏には子ども達が参加する夏祭りも行われたりしています。こうした活動には地域の大人達も参加していますし、また、長年にわたって子ども達の登下校を見守り、サポートしてくれている方々もいます。ただ、何かの行事の時に参加するという事と、不断に地域の子ども達を見守り、何時でも必要な手を差し伸べて行くという事との間には大きな開きがあるように感じます。

少なくとも、地域の人々が子ども達の発するシグナルに鈍感であってはなりませんし、特定の人が一生涯懸命であってもそれが一部の力に止まっている限りは、「地域で子どもを守り、育てる」という事からは遠いという事だと思います。まして、子ども達が外で元気に遊び回る声を「騒音」と感じるような人がいると、地域としてまとまった力を発揮する事は難しいでしょう。

そういう意味からすれば、地域の大人達自身の意識改革が求められると同時に、行政としても様々な研修機会や情報の提供、更には異世代間の交流を深めるための社会体験活動や文化スポーツ活動等の提供を通して、地域全体で子ども達を見守り育てて行こうとする機運や意識の醸成に努めて行く必要があると、改めて強く感じています。(塾頭：吉田 洋一)